

ねじりはちまき

11月 霜月 立冬 小雪の月となりました。

11月3日は文化の日です。7日立冬、15日七五三です。22日小雪、23日勤労感謝の日となっております。15日は七五三です。子供の健康と成長を祝う行事で、もともとは、幼少の頃病弱だった徳川五代将軍 綱吉の子、徳松の5歳の祝いを慶安3年(1650年)のこの日に行ったのが始まりとされています。

今ほど医療も発達していなかった時代、幼児の死亡率は高く、『子供は7つまでは神の子』とされて罪も問われず7歳になって氏子入りをし、初めて人として社会に認められたのです。5月節句と同じくめでたいから祝うのではなく祝うことで厄を払う重要な行事だったのです。秋から冬へと寒さが厳しくなります。暖かくしてお過ごしください。

幸田常一

<会社近況>

だんだんと朝晩の冷え込みが身に染みるようになってきました。乾燥する日が多く感じます。火の元には十分気を付けたいですね。ただいま本宮市で住宅修繕工事などお世話になっております。郡山市の現場では引き続き住宅新築工事をお世話になっております。

<冬支度>

『虫干し』という言葉があるそうで、着物や書籍に日を当てたり風を通したりするだけでなく家の中に風を通してあげることも立派な虫干しだそうです。出来れば2日以上晴れの続いた乾燥している日10時~14時くらいまでに行くと良いそうです。風通ししておくとも気持ちの良い収納環境が保てます。

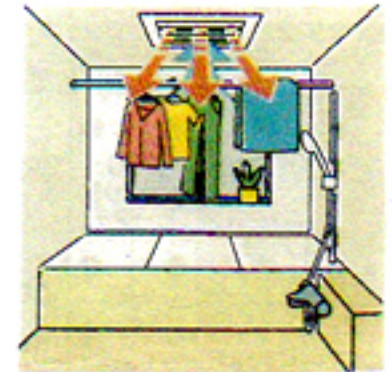
<商品紹介> バス換気乾燥機

詳細は弊社まで(*^^*)

バス乾燥機の機能で、健康・より快適なバスライフと浴室の有効活用をお手伝い！

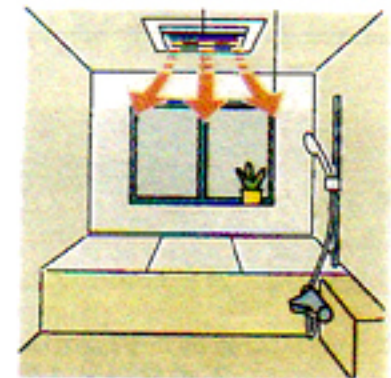
衣類乾燥機能

花粉の飛散や黄砂発生の多い春、雨や雪などで外での物干しができない時期が意外と多いと考えられます。また、天候が良くても、市街地やマンションにお住まいの方はプライバシーを気にされる方も多いと思われます。浴室に衣類乾燥機があれば、浴室の遊休時を利用し、しわになりにくい衣類乾燥ができます。



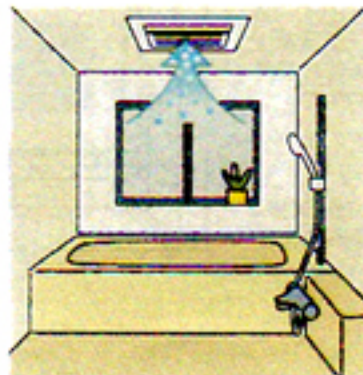
予備暖房機能

入浴前の予備暖房運転により、浴室に入る前から暖かくなり、脱衣所との温度差も少なくなり、浴室入室時のヒンヤリ感も緩和し、身体に負担をかけません。また、快適な入浴時間を過ごすことができます。



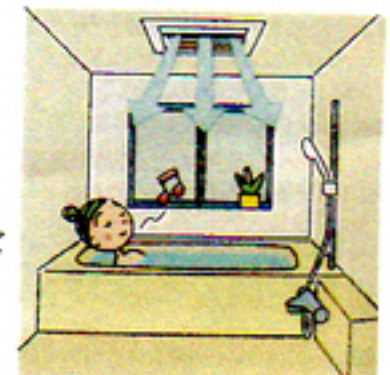
浴室換気機能

浴室使用後の水滴や湿気を排気し、カビの発生やいやなニオイを抑えます。



涼風機能

夏期の入浴時やお掃除時の暑さ対策に爽やかな涼風感を与えます。



浴室乾燥機能

入浴後の浴室は、水気が多く換気だけでは水滴が残っていることがあります。循環による送風、ヒーターによる温風を組み合わせることで浴室を乾燥します。

24時間常時換気機能

浴室から排気を行うことで、家全体の24時間常時換気が可能です。

<すまいの点検>

①年末の大掃除。

1年に一度の大掃除。見えない場所のホコリや汚れを一気にきれいにする時期ですね。12月に入ってからでは寒いので秋晴れの日を選んで計画的に進めるという方も多いようです。家の中も大事ですが、外回りもぐるりと回って劣化具合や破損していないかなど目視確認が必要です。

例えば…外灯→電球切れそう。ランプシェードが破損している。等…

外回りの塀→ぐらついている箇所。腐食している箇所。

雨樋、雨戸、網戸、外壁の状態。



また、修理が必要な場合にも業者に連絡が遅れると年明けになってしまうことがあります。長く住んでいく家なので、大きく壊れてしまう前に処置していきたいものです。



②配管の凍結防止

寒さが厳しい東北で注意が必要なのは水道の凍結です。一度凍ってしまうとなかなか元通りに戻すのは時間がかかり、大変です。



- ・蛇口を少しだけゆるめて水を少量出しておく。
- ・不凍栓を使用する。水道の凍結を防止するために水道管内の水を地中に排水する器具です。きちんとした操作により水道管が凍結する原因となる水抜きを行い、水道管の凍結を防止しましょう。

令和3年 11月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記>2022年へ向けて残り2か月です

ね。大掃除や、お正月の準備など

今からされる方も多いのではないで

しょうか。少しづつ計画的に進めた

いものですが、毎年なかなかスムー

ズにはいかない私です。(ほしの)

福島県への移住者

永く続くコロナ禍の中で、人口密集の東京を離れ、地方に移住したいという人が増えているという。また、テレワークが可能な人で大都会を脱出したいという動きもある。それとは別に、都会生活或は大企業での専門化とは別の価値観を持つに至って地方住まいや農林業の職業を選択されるケースもあるだろうし、また過疎地域の状況を目の当たりにして何か役に立ちたいという使命感に燃えて移住している例もあると聞く。また、子育てのうえで自然環境豊かな所を求めて移住する例もあるという。これらの移住ケースについてはテレビなどでも紹介されることがあるので、これまで幾つかの例を見る機会があった。この稿を書こうとしていたら、福島民友の報道に眼が止まった。内閣府の報告によると、来年3月大学卒業予定の大学生や大学院生の57%が、テレワークが進み働く場所が自由に決められる場合には「地方に住みたい」と回答したとのことである。この数字にはちょっと驚いてしまった。これもコロナ感染の拡大が影響を及ぼしているのであろう。

行政の方も近年、移住者を受け入れるための支援策を講じている。県や市町村では、地域特色の情報提供、相談窓口の設置、現地体験の支援、空き家情報の提供、サテライトオフィスの設置、就業の支援など様々である。移住支援金を出して援助するところもある。こうした支援策により移住者受け入れの実績を上げているところもあると思われる。

さて、移住者受け入れの支援策に「地域おこし協力隊」というのがあるが、ご存知だろうか。この制度は、人口減少や高齢化の進行が著しい地方において、地域外の人材を受け入れて、地域協力活動をしてもらい、かつその人材の定住化を促すことで、地域力の維持・強化を図ろうとするものである。地域おこし協力隊を志願する人は、自治体の募集に応募し、採用されれば自治体から委嘱を受け、住民票を移して一定の待遇（報酬等）の下に、協力隊としての活動をするようになる。期間はほぼ3年以内のようだ。活動内容は自治体から示されたものに基づく。地域の人々との関係づくりから、期待に応えるには本人の使命感と企画提示能力などが求められ、結構しんどいがやり甲斐があるものといえよう。それでは、県内の地域おこし協力隊の状況はどうだろうか。43の市町村と県で183人の隊員がいるとのことである。それでは、隊員の活動と定住の例はどうだろうか。ひとつ見つけたので紹介したい。それはいわき市遠野地区（阿武隈山系）での例である。

遠野地区には400年の伝統を有する「遠野和紙」がある。しかし、過疎化が進行し、和紙すきの担い手も高齢化する一方後継者もだんだんいなくなってきた。そこで、いわき市が地域おこし協力隊を募集したところ、神奈川県に住む30歳代の平山祐・綾子夫妻が応募されたのである。こうしていわき市から委嘱を受けて、令和元年10月から平山夫妻の活動が開始された。その活動は地元の先達から指導を受けながらの「紙漉き（すき）」の修行である。紙の原料は楮（こうぞ）である。これは地元の方が栽培・提供してくれる。紙漉きの修行をしながら、地域の人々との交流も深めていった。そうするうちに、和紙への思い、和紙の伝統のある遠野への思いが深まっていくのであった。勿論、紙漉きの腕は上がっていった。地元の期待も肌で感じていただろう。2年半の協力隊としての役割も終わりに近づいてきた。そこで平山夫妻の定住への思いは決まる。そして、令和3年5月1日から定住するに当たって、「遠野紙小屋」をオープンしたのである。ここでは、和紙製品の販売をすると共に紙漉き体験コーナーを設けている。地元の人々に祝福されてのスタートであった。これから何かと苦労も多いだろうが、是非頑張りぬいてもらいたいと思う。ところで、和紙について、我々はどれほどの知識をもっているのだろうか。残念ながら余りないと思う。一言でいうと、和紙は何年経っても変わらず、丈夫であること、そしてあたたかみがあること、さらに保温性・吸湿性があることが挙げられる。例えば、故文書には和紙に墨字で書かれているが1000年以上経っても持ちこたえているのである。

次に原発事故地域に支援の移住をしている例を紹介したい。作家の柳美理さんである。南相馬市小高区に2015年4月から移住している。柳さんは、ご案内の通り直木賞受賞作家であり、最近では、地元の原発事故避難者をモチーフに描いた小説「JR 上野駅公園口」が全米図書賞（アメリカで権威ある賞）を受賞したことで話題になった。柳さんが小高を訪れたのは大震災・原発事故直後の2011年4月のことであった（小高は避難指示指定区域であった）。2012年2月から臨時災害放送局でラジオ番組「ふたりとひとり」を開始し、1か月に1回、小高に2週間滞在するようになった。やがて、地元の人々との交流も深まって地元馴染み、2015年には鎌倉市から小高に移住したのである。今柳さんは、ブックカフェ「フルハウス」をオープンしている。2018年4月からである。何で本屋とカフェなのか。柳さんが語るには、原発事故後この一帯には本屋がなくなり、家の本も被災した。それと、小高高校の通学生は本数の少ない電車を駅舎で待つが、この本屋を第2駅舎としての居場所になればと。またそこが、地域の”魂の避難場所として使ってもらえば”との願いを込めて本屋を開いたという。そして、カフェも。”心のささくれが、傷になって痛む”のを、美味しいもの（地元の食材で）を食べたら、”美味しい”という言葉が出てくる、それが”手当”になる、というわけである。著名人で、このような愛深い方にご支援をいただいて、小高の人々はどんなにか心強いことであろうと思われる。

次に本宮に近い所に移住している人を紹介したい（県の移住ポータルサイトから）。二本松市東和地区に2011年に移住された小林正典・愛枝さん夫妻のことである。家族は子ども2人いて4人暮らし。今養鶏を中心とした循環型農場を「めぐり農園」と名付け、頑張っておられる。ご夫婦とも東京の同じ会社に勤めていて、職場結婚をした。ある時正典さんが産直のスナックえんどうを食べて、とても甘くてびっくり。こういう作物を自分で育てて食べられる生活をしたかったと思ったそうだ。愛枝さんも都会育ちだが、自然豊かなところで農的暮らしをしてみたいと思っていたという。夫婦の思いが一致した。そこで2人で移住先探しを始めたのである。いろいろ探しているうち、ある時都内のイベントで、二本松市東和地区で耕作放棄地を畑に戻す取り組みをしていることを知る。正典さんは、伐根して(桑畑だったのか)整地し、畑として蘇らせることはとても大変な作業だが、自分で畑を一から作れることに魅力を感じたという。すごい情熱だ、やる気が違う。それから何回も東和に通う。そして研修先の農家も決まる。20年間勤めた会社も辞めることにした。いよいよ移住である。時は2011年3月。大震災・原発事故が発生した。ダメなら引き返そうと、とにかく東和に車で赴いた。行ってみたら、研修先の農家が気持ちよく迎えてくれたのである。そこで農家の指導を受け、農業実習の研修が始まった。

1年後に研修を終え、畑も出来上がり、目指していた無農薬の米と野菜づくりを始めることができた。そして3年目には、移住する時から念頭にあった養鶏に取り組み始める。敷地内に鶏舎を建てるが、すべて手作りである。養鶏の餌は自ら育てた無農薬野菜とし、少数の鶏を自由に歩かせて育てる「平飼い」という方法で鶏卵を生産しているのだ。今では定期的購入者が増え、店舗では手に入らないほどの人気になっているという。正典さんはここまでこられたのは、偏に地域の皆さんが地域ぐるみで支援していただいたお蔭であると語っている。正典さんのように移住し、就農していただける人がいれば、過疎地にとって大変心強く、有難いことであると思う。　今回はこれで終わりとする。

晩秋の吾妻連峰、幕川温泉～高山 周回

自分は11月中に古稀を迎える。記念山行を考えていたら、丁度先輩のSさんから誘いがあり、吾妻連峰の南東の一画、幕川温泉から高山(1805m)に登りスカイラインの一部を通り幕川温泉まで周回するコースの提案だ。妻と二人で参加することにした。

11月6日(土)8時半、R115号線土湯峠道の駅で、福島市のSさんと待ち合わせる。吾妻連峰の高山が黒々と大きく見える。右奥の一切経山からは噴煙が上がっている。(写真①) 天気が良くワクワクしてくる。

自分は、最近ほとんど単独行だがかつては近所の人達と一緒に山登りをしていて、北海道知床半島の羅臼岳までワゴン車で行ったこともある。

Sさんはかつての職場の先輩で満77歳。自分は山に登る場合は必ず山頂を目指すが、Sさんの登山のスタイルはいわゆるピークハンターではない。自分の好きな景観・場所を散策し、ピークに至る場合は散策の結果である。6月にも誘われて浄土平(1600m)から鷲籠山(かごやま)稲荷神社(1786m)と谷地平を散策した。吾妻山(吾妻連峰)は福島県北部から山形県境にまたがり、最高峰は西吾妻山(百、2035m)で山域は広大でいくつものコースがある。

今回は、福島市幕川温泉がスタートだ。旅館手前の5～6台駐車可能な駐車場をSさん、妻、私の順で9:20出発。水戸屋旅館の右手、吉倉屋旅館との間を通過して登山口に至る。

岩場の急坂や木の橋などを慎重に歩き20分ぐらいで幕滝に着く。青空をバックに流れ落ちる水、岩に張り付く苔や草紅(黄)葉(くさもみじ)。この季節ならではの素晴らしい景観だ。(写真②)

少し戻り高山を目指す。そんなに急ではないが刈り払いされた笹は滑る。葉が落ちて裸になったナラやクヌギ、ブナなどの広葉樹林の中を登っていく。(写真③) コメツガやオオシラビソの針葉樹群落の中にナナカマドが赤い実を付けていた。(写真④)

2つの池塘がある麦平で休憩する。テレビ電波の反射板のある高山の上部に少しガスがかかってきた。針葉樹林の中に手を広げたような落葉したダケカンバ、笹の緑、池塘の中の草もみじがきれいだった。(写真⑤) 不思議なことに手前の池塘には水がなかった。

麦平から高山は近くに見えたが、登山道は南東斜面を斜めに登っていくが、倒木や岩場がありしだいに勾配が急になり、妻の足取りが鈍くなる。妻は近年山から遠ざかっている。

高山山頂に着いたのは12:40。幕滝見学と麦平での休憩を含めてスタートから3時間20分かかった。少し先にチシマ笹が刈り払いされ、真新しいピンクの

テープに誘われて行くとそこに三等三角点の石柱があったが山頂を示す標識はなかった。

小広い山頂には福島の民放テレビ局の10m四方の反射板2基があり昭和58年に設置されたと銘板に書いてある。遠くから高山を同定できるのはこの無粋な反射板があるからだ。

久しぶりの複数人数での山行を楽しむため、またザックの重さの訓練を兼ねてコップェル大・中・小やガスボンベ2つ、余分に水2Lペットボトルを背負ってきた。早速お湯を沸かし自分はカップワントン。二人はいらぬという。コーヒータイムを楽しんだが、雲が多くなってきて日が陰り体が冷えてきた。

食事後写真を撮っている間に日が差してきて暖かくなってきた。山の天気は変わりやすい。

高山からは安達太良連峰が間近に見える。普段、安達太良の東南に位置する本宮市や郡山市の標高200m～300mから見る景観とは反對方角の、標高1800mから見る景観は全く異なり興味深い。

左手前から鷲倉温泉の崩壊地と湯煙、野地温泉、鬼面山、箕輪山、鉄山、矢筈ヶ森、安達太良山山頂も同定できた。(写真⑥)

高山から西南に見える磐梯山は尖って見える。樹林の間からさらに左手に見える湖面は猪苗代湖か。

奥に東吾妻山、右に反射板を背景に写真を撮って貰い(写真⑦)(古稀記念に初めて素顔を曝す、妻の抵抗あり)、14時鳥子平(スカイライン側)に向け下山開始。結構急な下りで刈り払いされた笹が滑って歩きにくい。スカイライン沿いから2～3分の所にある鳥小平の池塘。(写真⑧) 来春にまた来たいと思う。

スカイラインの舗装路歩きは車の往来が多いので注意して歩く。再び左側の山道に入り、さらにもう一度少しだけスカイラインに出るが以降は山道の下りになりオオシラビソ群落などを通り、15:40登山口に復する。昼食休憩を含め6時間20分の山行を無事終える。

Sさんと相談し、11月中に土湯温泉側、男沼林道の高山登山口から登り表平に至る道を歩く約束をする。まだ雪が降っても歩けないほどの積雪にはならないと思うので、天候と相談しながら計画したい。単独行だと気楽である一方不安がつきまとうが複数だと安心感がありこれまた楽しい。

冬の間は、日本三百名山の山行は中断。山登りの体力はジムや平地歩きでは得られないので、体力保持のため山行は続ける。

帰宅途中、野地温泉の所から見た夕映えの高山がきれいだった。(写真⑨)

自分の古稀記念山行につきあってくれたSさんと妻とに感謝する。

令和3年11月 NO103 アンチ・エイジング 山旅遊人



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨